

---

# あの月にさよならを

朝平 夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの月にさよならを

### 【著者名】

Z3897A

### 【作者略】

朝平 夜

### 【あらすじ】

僕には、あの空に浮かぶ月は必要ない。僕だけの月が、僕には居るから。だからサヨナラ、あの空の月。

わたし 知つてたんだ。わたしが、もうすぐ死んじゃうこと。  
けどね、忘れないで、わたしのこと。ずっと…あなたの胸で、生きさせて。

「わたし…思ふんだけど」

いきなり<sup>アカリ</sup>灯が口を開く。時は夕刻。辺りはオレンジ色で、影が色濃く地を這う。

「死ぬって、生まれ変わることなんじやないかな」

灯は、僕の年上の彼女。大学のサークルで出逢い、気が附いて、告白して、付き合い始めた。普通の、今時の男女。

新しく出来たオープンカフェに行き、ゆっくりとした時の流れを感じ。買い物があるという灯に付き合つて、商店街で買い物。そして、近所の公園のブランコを陣取る僕ら。子供たちは、もう居ない。温かい家へと帰ったから。

「どうこと？」

いきなりの灯の言葉に首を捻りながら、僕。

「…人には、生きる時間に限りがある。生まれてすぐ死ぬかもしれない。記録になるくらい長生きするかもしない。でもいつかは死ぬ」

「……」

灯の言葉は、何かを告げようとしている。けれど僕にはわからない。だから、黙つて聞く。少しでも理解できるように。

「でもね、人は死んだ瞬間から、その人を知る全ての人的心に移り住むの。少し形を変えて」

「形を…変えて?」うん、と頷く灯。

横顔が綺麗だ。僕は改めてそう思った。

「記憶は、所々歪んで作られてるでしょ?思い込みとか、勘違いと

か

「う、うん」

「だから、みんなはその人の正しい姿を思い出せないの。好きだつた人はより美しい姿に。嫌いだつた人はより醜い姿に記憶の中で変えられる。だから、生まれ変わる」

よくわからないけど、言いたいことは何となく伝わる。…気がする。

「…わたしの姿は、あなたの胸にどう残る?」

「え?」

「わたしが死んだら…あなたの中でわたしはどう生まれ変わるかな」  
灯の微笑みは、いつもと違つた。怖い。彼女が、居なくなる。

僕は灯をきつつきつく抱き締めた。

「居なくならないで、灯。僕は灯が居なきや…」

「……」

「灯、灯、灯」

「わたし、幸せ。あなたに名前を呼んでもられて…」  
そつと唇が重なつた。

温かい

血が通つてゐる

灯は、

生きてゐる。

「…わたし入院するの」

「え」

「知つてるでしょ?昔から体弱いから…検査入院だよ、ただの「  
灯の豊かな黒髪が、風にゆらゆらと揺れる。ただの、という言葉を  
灯は強調した。僕は、そつか、と頷くしかなかつた。

「わたし、生まれ変わるなら元になりたい」

「帰り道、灯は言つた。どうして、と僕は問い合わせる。  
「あなたを照らしてあげられるから」

ありきたりだけど、と灯は苦笑混じりに微笑んだ。灯のその困つた

ような微笑みが、僕は何故か好きだった。

「太陽じゃダメなの？」

「ダメ。太陽は」

「何で」

「あんなに強い光を、あなたは見つめられないから。優しくて弱い月明かりなら、あなたは見つめていてくれるでしょ」

灯の言葉は、僕の胸にゆっくりと届く。

僕は、

彼女が、

「好きだよ灯」

「わたしも」

「検査入院終わつたら、動物園行こう。前からの約束だったから」

「嬉しい。じゃあ、張り切つてお弁当作るから」

「本当に？灯の弁当大好き」

とっくに灯の自宅前に着いているのに、言葉が次々に出てくる。足も動かない。脳が帰れと指令を発さない。

どれくらい過ぎたろう。灯が小さくしゃみをした。そこでやっと僕は、中に入りなよと言えた。もしもあのままだつたなら、僕は灯を連れて走り出していた。行き先も決めず。彼女と、別れたくないから。

「そうだね、…今日はありがとう…」

「うん」

「しばらく会えないけど、…寂しかつたら月を見上げて」

「うん」

「わたしは、あなたを見つめてるから」

「うん」

「ねえ」

「うん」

「大好き」

「…うん」

あの時の……最期に見た彼女は、誰よりも美しく僕を見つめていた。

いや、今も僕を見つめている。

僕は彼女の居場所を、知っているから。

ね。

僕だけの、胸の中のお月様。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3897a/>

---

あの月にさよならを

2011年1月25日04時25分発行